

令和8年度 小児リハに関する有識者懇談会

- 日時：2026年6月25日（木） 19：00～21：00 （ZOOM開催）
- 出席者
 - ・有識者（五十音順）
菅野泉（シーキューブ訪問看護ステーション）、中田隆文（マリオス小林内科）
福田之紘（たぐち脳神経外科クリニック）、藤村勇人（岩手県立療育センター）
藤原智秀（株式会社ハピティはぴるど）、米沢勇悦/高橋恵美（岩手医大附属病院）
 - ・オブザーバー：（理事）及川会長、小林理事、菊池事務部長
（職能部員）佐々木成大、四日市綾香
 - ・運営スタッフ（職能部）：佐藤英雄、野中一成、佐藤晋樹、久野純治、山口裕美
- テーマ 「県内の小児リハのニーズに対し理学療法士ができること」
 - 1) 開会挨拶、趣旨説明 （野中）
 - 2) 意見交換（進行：佐藤英雄、記録：山口）
 - ・自己紹介（現在の小児リハへの関わり方含め）
 - ・小児リハに関する現状や課題（調査報告/有識者意見）
 - ・人材育成や学び方
 - ・情報交換やネットワーク
 - ・その他意見交換
 - 3) 閉会挨拶（久野）

小児リハビリテーションに関する有識者懇談会 意見交換概要

1. 開催概要

テーマ: 小児領域における現状と課題、人材育成、地域・職種間ネットワークの構築

背景: 対象疾患の多様化、医療的ケア児の増加、小児から成人への移行期（トランジション）における課題に対し、現場の現状を共有し解決策を模索する。

2. 各領域における現状と課題（発言要旨）

① ライフステージの移行（トランジション）と家族支援

- 成人の課題（18歳以降）: 高等部卒業後に医療機関との繋がりや主治医を失うケースが多い。活動量低下による二次障害（機能低下）の進行、補装具の再作製・メンテナンスの相談先不足、介護者の高齢化が深刻化している。
- 医療的ケア児の多様化: 従来の呼吸管理だけでなく、栄養（胃瘻）・排泄・酸素・吸引など高度かつ多様なケアが必要な児が増加。各ステージに応じたアプローチの切り替えが不可欠。
- 家族への心理的・生活支援: 義務教育開始に伴う両親の就労継続を支える関わり（訪問時間の工夫など）や、障害の受容段階に応じた配慮、保護者の生活背景に寄り添う姿勢が求められる。

② 各現場における臨床の課題

- 療育センター: 系統立てて小児リハを学ぶ機会が不足しており、実技研修の場も少ない（現状は **OJT** や能動的な文献検索が中心）。理学療法士協会の認定カリキュラムは有用。
- 放課後等デイサービス: セラピストの手厚い配置が強みである一方、医師不在のため医療判断の境界線に注意が必要。岩手県内におけるリハビリ機会の地域格差や、発達障害重複児への関係性構築（拒否や遊びを通じた関わり）の難しさがある。
- 訪問リハビリテーション: 相談支援専門員の介入があっても情報不足のまま開始されることが多い。学校や仕事終わりに訪問するため、無理な運動学習ではなく、身体を「リセットする（ストレッチ等）」現実的なアプローチが強く求められている。
- 大学病院（急性期）: 入院期間が短く疾患が極めて多様（小児がん等）。小児専門 **PT** が固定でおらず、退院後の地域連携や地域の制度が院内スタッフに浸透していない。

3. 人材育成と学び方の方向性

- 他県・他職種の好事例: 秋田県等の理学療法士会や言語聴覚士会では、ビデオ（**VTR**）を用いたケーススタディ・症例検討会を展開。ベテランの意見を聴くことや **Web** 動画で実際の介入場面を見ることは、自身のアプローチの「答え合わせ」や安心感に繋がる。
- 受講者側の感度（アンテナ）: 「小児領域は自分に関係ない」と壁を作らず、他領域での誘導方法や関わりの引き出しを、自身の臨床（脳血管障害や高齢者）へどう繋げるかという意識改革が重要。

4. 情報共有と地域・職種間ネットワークの構築

- 個別チームでの連携: 相談支援専門員の圧倒的不足からシステム構築には時間を要するため、まずは「目の前のその子」を中心とした個別チームでの連携（療育センターの指示書を在宅訪問で再現するなど）が現実的。
- 顔の見える関係性の構築: 地域スタッフ同士が顔見知りになるだけで保護者の安心感は向上する。病院見学システムの周知（療育センターでの申請による見学など）を進め、連携の壁を低くする。
- 情報提供の工夫: 公的機関から特定の民間事業所を直接紹介しにくい仕組みに対し、「PT が在籍している事業所リスト」を共有するなどの代替手立てを検討する。

5. 総括

小児領域は対象疾患やステージが多岐にわたるため、一律の研修会構築は困難である。しかし「トランジション（移行支援）」「保護者との関わり」「地域での孤立防止」という共通の課題が明確になった。

今後は専門特化した特定の PT 育成に留まらず、「岩手県内の全世代の理学療法士が、苦手意識を持たずに小児・移行期に関われる体制・底上げ」を目指し、士会として事例検討会や動画を活用した研修制度の構築を具体化していく。

（記録担当：山口裕美）